

## 二 寺田川古墳

### 概要

県道長尾稗田平島線  
に近い下黒田の丘陵

上にある。この丘陵上にはほかに低墳丘の二基の円墳が残存し、寺田川古墳とは数十メートルの距離をもつ。おそらく累代の墓域を形成するものである。かつてはいま一基が存在したという。昭和三十九年（一九六四）に石人石馬研究会によって一部発掘調査を伴う石室実測作業がなされ、玄室左袖に頭骨片・鈍、その脇に円筒埴輪片二点、玄室奥壁左隅で鉄片一点・土師器一点、同右隅で土師器片一点が出土したというが、出土品の所在・詳細は不明である（小田富士雄の教示による）。

### 墳丘

古墳は現在竹林となっていて、墳丘の変形も進んでいる。現状で全長一九メートルの規模をもち、周溝は全く見えな

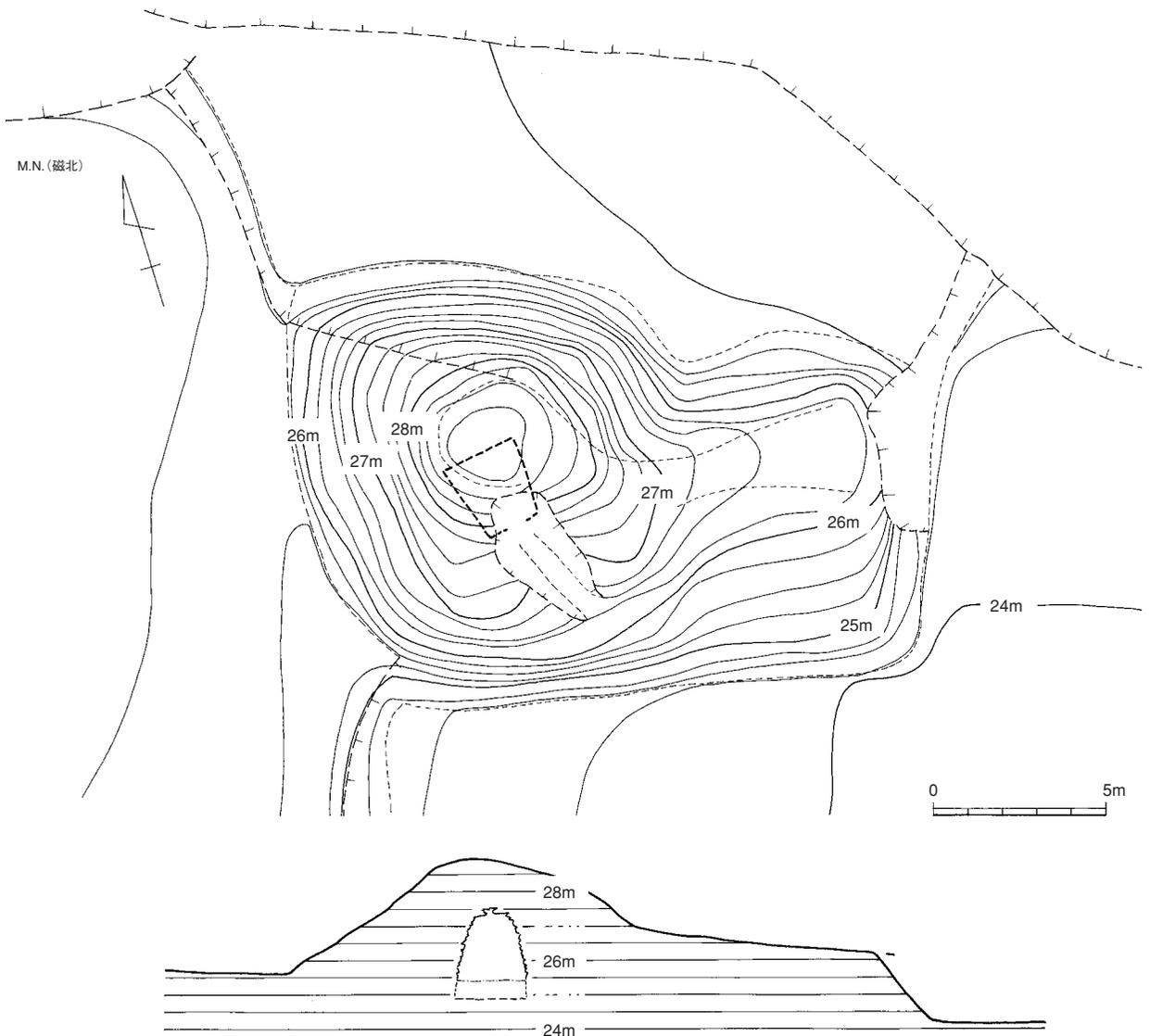


図2—122 寺田川古墳墳丘測量図 (1/200)

い。石室が開口する西側は一段低くなっており、南側の墳裾となる標高二五・二五メートルのラインを追うと後円部径は約一二メートルとなる。主体部奥壁が現状の後円部の中心付近に位置することから本来の規模と見てよいであろう。周溝・葺石・埴輪は見えない。

**主体部**

単室の横穴式石室である。現状では前面が大きく崩落し、天井石は最後部の一枚が残存するだけで、入口部は厚く埋まっている。図化を試みたが、石室内部は四〇センチ以上の土砂が堆積し、特に入口付近は袖石もほぼすべて隠れていて細部は不明のままである。現状の床面規模を見ると、長さ二・二メートル、幅は奥壁で二・二メートル、前端付近で約一・五メートル、高さは約二メートルが確認できるが、本来は二・四メートルを測ったという。石材は最下段に比較的大型の腰石を用いるほかは厚さ二〇センチ内外の小型の石材を積み上げ、目地に小石を多用する。袖石の前

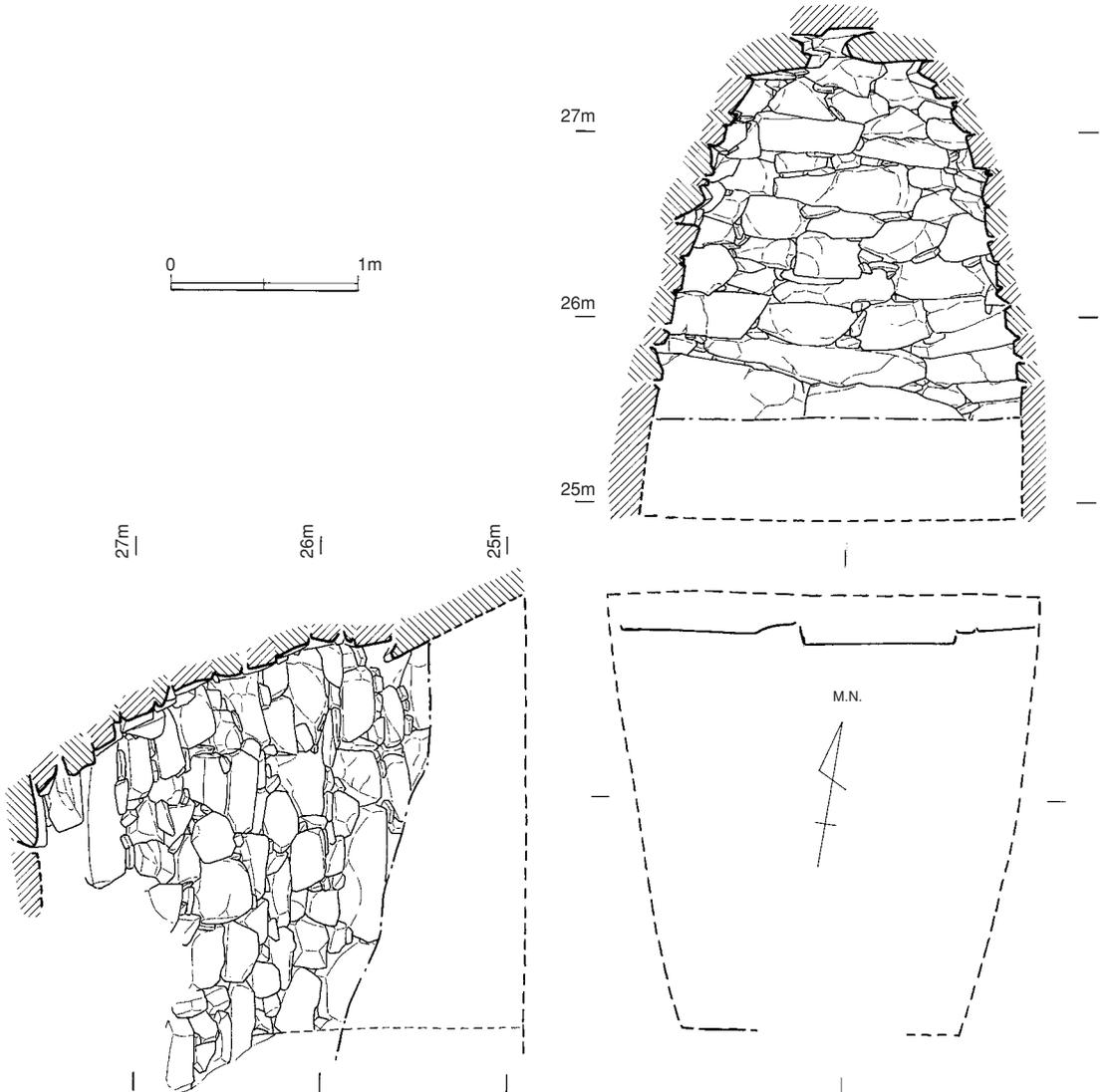


図2—123 寺田川古墳主体部実測図 (1/40)

面の積石が少なく、前庭部は未発達なようである。

平面規模に比して高さが非常に高い石室で、石材から見ても六世紀初頭前後に比定できよう。

### 三 扇八幡古墳（県指定史跡）

#### 概要

箕田地区西側の低丘陵上に造られた前方後円墳で、後述する箕田丸山古墳とは二〇〇メートルほどの距離をもつ。前方部端の一部が社殿で破壊されるほかは美しい姿を残していることから県史跡に指定されているが、平成十六年の台風により巨木が倒壊し、墳丘が痛んだことは残念である。発掘調査はなされたことがなく、埋葬部は不明で、出土品の伝来もない。円筒埴輪が採集されており、墳丘の一部には葦石も散見できる。

#### 墳丘

主軸をほぼ南北方向にとり、全長約五八・四メートル、後円部は直径三六メートル、高さ約七メートル、前方部は最大幅四九メートル、高さ約五メートルで、周囲には幅三メートル五メートルの周濠が巡る。更に周濠の外側には周堤と呼ばれる高まりが付設されていて、周堤の外側まで含めると全長八二・五メートルを測り、町内最大の庄屋塚古墳に次ぐ規模である。

周堤南側の一部が張り出したようになることから、筑紫君磐井の墓に比定される八女市岩戸山古墳の「別区」と呼ばれる区画との類似性が指摘されたが、未発掘のためそうした構造の有

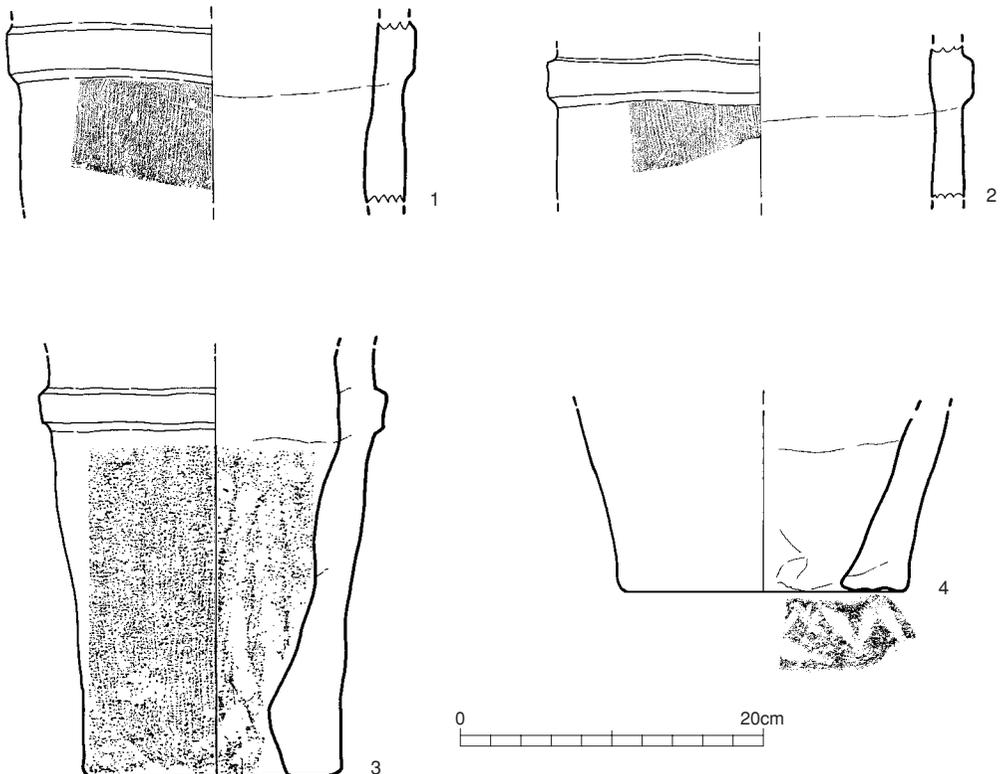


図2—124 扇八幡古墳出土埴輪実測図 (1/5) (3のみ『八雷古墳』より転載)